



## プロ指導経験者の立場から

## 吉井 理人

北海道日本ハムファイターズ一軍投手コーチ

和歌山県出身。箕島高校から近鉄バファローズに入団。1988年には抑え投手として活躍し、10勝24セーブで最優秀救援投手。1995年にヤクルトスワローズに移籍し、先発投手として、リーグ優勝・日本一に貢献。1997年オフにFA権を行使し、ニューヨーク・メッツに移籍。その後、コロラド・ロッキーズ、モンリオール・エクスポズとメジャーリーグ3球団、そして2003年帰国後、オリックス・ブルーウェーブ、ロッテ・マリーンズの2球団でプレー。2014年度には、筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程に入学し、2016年に修士号（体育学）を授与。現在は、北海道日本ハムファイターズ一軍投手コーチ。



私は23年間の現役生活の後、5年間の投手コーチを経て筑波大学大学院へ入学しました。在学中にコーチに復帰するわけですが、コーチと研究者という両側面から野球に触れられたことは、コーチとしての引き出しを増やすことにつながったと考えています。

さて日本野球科学学会の目的として「指導現場と研究者間での情報の流動性を高めること」があります。私は現在、現役コーチという立場ですが、研究はまだ現場に入ってきていない、逆に現場の方もまだまだ研究の方に入っていないと感じています。指導現場の立場から研究というと敷居が高いとか、現場にあまり理解のない人たちが興味で研究しているというイメージを持っている人は少なくありません。私も大学院に入学するまでは、そのようなイメージを少なからず持っていました。その原因の1つとして現場と研究で用いられる言語について課題があると考えています。在学中の授業において聞き慣れない言語や表現に戸惑ったことを覚えています。研究現場では常用されている言語も指導現場では適さない場合もあるのではないのでしょうか。指導者が有益な知見を現場に生かしたいと思っても研究者の話が聞き慣れない難しい言語ばかりでは、情報の

流動性を高めることはできません。逆に指導者は研究で用いられる言語を学ぶことによって研究の知見や成果を学ぶこともできるでしょう。よって本研究会では、研究成果や知見を幅広く共有するために研究者と指導者の両視点から議論や講義を行う必要があるのではないのでしょうか。そして今後はそのような場を通して現場と研究とを繋ぐことのできる指導者と研究者の養成が必要となるのではないかと考えています。

近年、研究雑誌や報告集においてセイバーメトリクスやビックデータなどの文言をよく目にするようになりました。しかし実際の現場では選手、コーチがデータの内容や有用性を理解できていなかったり、コーチが興味を示さなかったりという実態があります。データがあれば選手は、興味を示しますが、伴ってデータやアナリストとの交流が増えることでコーチとしての立場がなくなるのではないかと考えているコーチもいます。しかし近年データ活用に伴って結果が出始めていること、様々な機器の導入によって多種多様なデータが算出可能になっていることを考慮すれば、今後コーチがデータを活用したコーチングを行う時代になっていくことは想像できます。現在のプロ野球界には優れた指導力、経験を持ち合わせてい

るコーチが多数存在します。今後はその貴重な指導力と経験、データをマッチングさせたコーチング実践のニーズが高くなっていくのではないかと考えています。そのような点において本研究会が選手やコーチが様々なデータに触れ、データについて研究者と共に考えていける場になること、まさに研究と現場をつなぐ「Open」な開かれた会になることを望んでいます。日本野球科学学会を通して、日本野球界の発展のために現場と研究の両側面から益々盛り上げていきましょう！！